

ふらい

2017 winter
vol.3

公益財団法人 PHOENIX
木材・合板博物館情報誌

写真：「HIDA」

PLY

木と人の素敵な出会いを探る

巻頭インタビュー ■ 「重ねる」

第3回 飛驒産業株式会社

代表取締役社長 岡田賛三

木漏れ日散策 01 東京造形大学 学長 山際康之

木を楽しもう 03 ウッドワンダーランド 2017

“伝統家具の常識を変え、” 技と素材を活かす

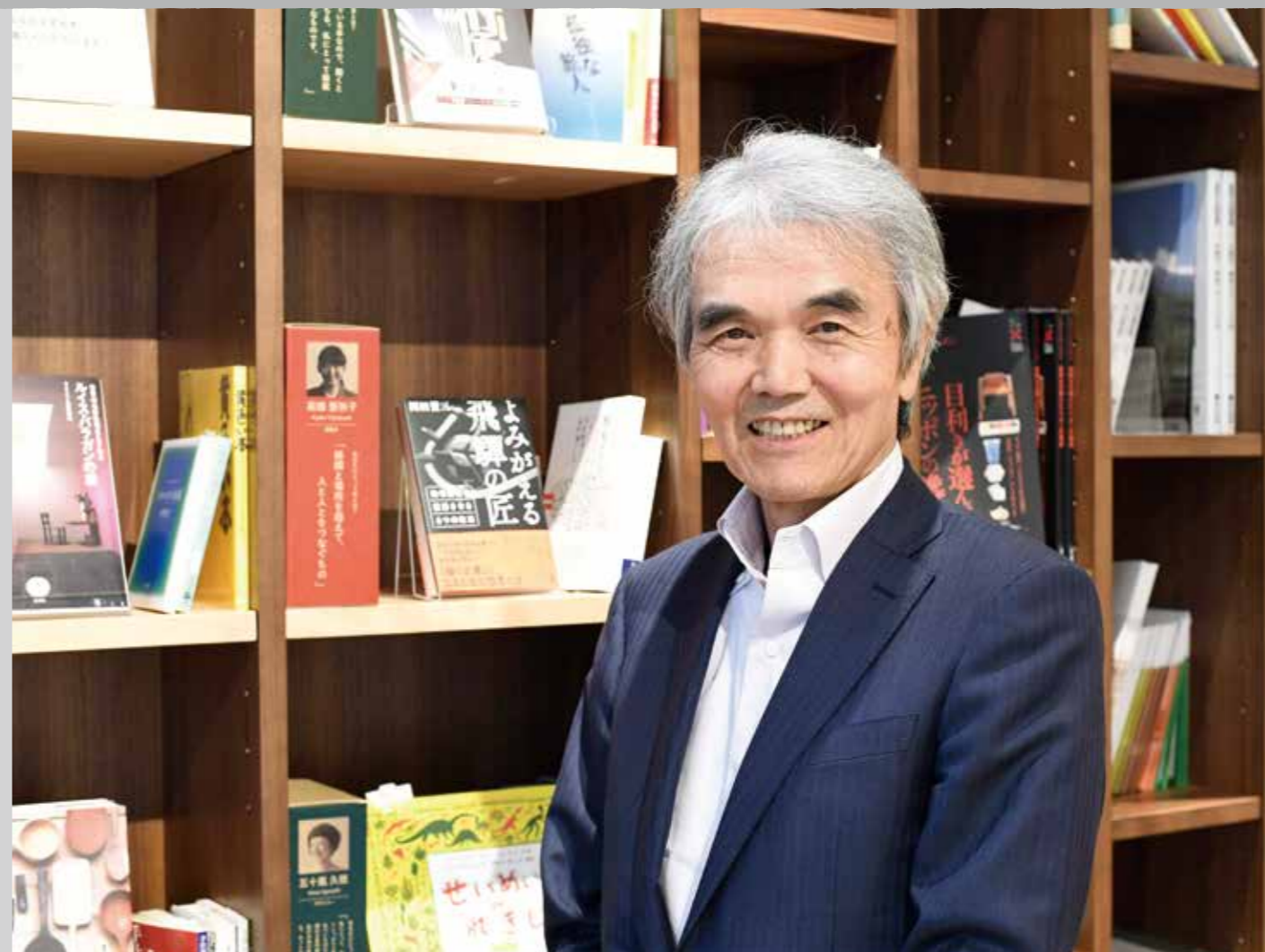


西洋家具としては二番目の歴史となりま
すね。飛騨地方は飛鳥・奈良の時代には毎年
百人近くの匠を都へ送り、寺社仏閣の建設に
携わってきた土地柄ですから、木という素材、
昔からの木工技術を良く知る職人が多い。だ
から飛騨の家具は非常に作りがしっかりし
ているんです。うちの家具も10年間は修理
無料の「10年保証」をつけるほど丈夫です。
飛騨で西洋家具を作り始めたのは大正時

代です。これからの時代は西洋家具だと言っ
て曲げ木の技術を紹介した人がいて、それ
を使って椅子を作り始めたのが飛騨産業で
す。以来、飛騨の家具産業は豊富な森林資
源を活かし、とくに椅子やテーブル、机など
の脚物家具で成長してきました。飛騨産業
も政府から輸出貢献企業として表彰され
た。ところで、高山では数少ない「大企業」でし
た。ところが、高度成長期を過ぎて日本の
家具出荷額は急激に減り、1990年には約
3兆3900億円あった出荷額が2010年
には1兆3660億円までに減った。滝の

“飛騨”といえば木工のイメージがありま
すが、飛騨産業はその中でも老舗の家具
メーカーだそうですね。

飛騨の老舗の最期を看取る？



第3回

「重ねる」

ka·sa·ne·ru

PLY

巻頭インタビュー

木は樹種によって顔が違います。
木肌の色、木目の模様、木の香り。
節や枝の様子もさまざまです。
そんな個性を活かした
ユニークな家具で評判なのが
岐阜県高山市の飛騨産業です。
代々引き継がれてきた
地域の素材と技術を活かし
地場産業を盛り上げる。
山も地域も人も元気になる話です。

飛騨産業株式会社
代表取締役社長 **岡田 賛三**



「kinoe」シリーズは、廃材となっていた枝を部材に活かした。



従来の常識を覆し、節を活かして看板商品となった「森のことば」シリーズ。

示会の翌春に商品化するところ、その年の10月末には発売という異例の展開となったんです。当然、工場のスタッフには苦勞をかけた。節は板の端にくると欠けやすいし、柱目の節は形が不規則で、ささくれたりする。お客さまが怪我をしないよう手作業で削り直すなど、今までの3倍も4倍も手間をかけて頑張ってくれました。

おかげさまで、このシリーズは今でも当社のトップシェアです。やはり、自然を直に感じられるところいいんでしょうね。素人の方は天板の美しい木目が突板か印刷か、触らず

研究を始めました。

じつは、スギは家具材としては軟らかすぎるといふ問題もあったんです。しかし、圧縮して硬化させれば使えるだろうと。そこで、岐阜大学の先生に圧縮技術を持つ企業を紹介していただき試作を始めたんですが、圧縮しても時間が経つと天板に割れが入ったり、濡れると盛り上がったります。もっと精度の高い技術にするにはどうしたらいいのかと考えたときに、圧縮した材を固定するのは曲げ木を固定する技術と同じだと言われたんです。私たちの90年に渡る曲げ木技術が役に

で見分けることは難しい。でも、節があつて穴まで空いていたら、これはどう見たって無垢材です。節の模様も自然素材ならではの良さとなった。節がないという前提を、節はある“に変えただけのことなんですけどね。

伝統的な曲げ木技術を応用した、スギの家具も発表されました。スギの家具といふのは確かに珍しいですね。

これも、そもそもは森が豊かな飛騨高山で、なぜ木を輸入するのかという私の疑問がきっかけです。聞けば、家具材となる広葉樹は戦後みんな伐られてしまったし、国策で植えた成長の早いスギやヒノキも安い輸入材に押されて手入れもされずに放置されていると。ならば、それを家具にしてビジネスにできれば、間伐もできるし山の仕事も復活するんじゃないか。そう思つて地域の方たちと



私は家具については素人ですが、工場を回ると不良品が非常に多いのが気になったんです。理由を尋ねると「節があるから」だと。節のある家具は高級家具としては不良品だと言うんですね。私はもとより環境派ですから「節があるから廃棄だなんて自然に對

家具についてもアイデアを出された聞いています。

素人の発想から生まれた新しい家具

私は高山生まれ高山育ちですが、31歳で地域密着型のホームセンターを立ち上げ、「ユア・カンパニー」を理念に社会の公器となるべく頑張ってきました。飛騨産業とは祖父が創業メンバーの1人だったというご縁で社外監査役をしていました。しかし、私が就任する前の経営状況は大変厳しく、さらに社長が病気で退任された。私は長年勤めた会社の役員を辞め、老後を楽しもうと思つていた矢先でしたが、尊敬する地元の先輩方から「好きなようにして良いから飛騨産業を看取ってくれ」とまで言われ、それなら

命がけでやってみようと腹をくくりました。ちょうど2000年、私が57歳の時です。改めて会社の数字を見ると、とにかく身震いするような在庫の山がありました。昔からの慣習で見込み生産を続けていたんですね。そこで、まず在庫の山や遊休資産を処分して、生産体制も受注生産へと転換しました。また、これまでの代理店経由の販売をやめて、小売店に直取引、現金買取、仕入れ価格の見直しをお願いしました。門前払いをされても仕方がない無茶なお願いでしたが、2回、3回と頭を下げるうちに、「飛騨産業の家具がないと売場もつけれないし、しょうがないな」と言っていた。先人が築いてきた技術と商品力、そして信用のおかげだと本当にありがたく思いました。

「自身の事業経営から一転、飛騨産業の社長に就かれた経緯を聞かせてください。」

ような急流を流れ落ち、飛騨産業も経営難に陥ったんです。

命がけでやってみようと腹をくくりました。ちょうど2000年、私が57歳の時です。改めて会社の数字を見ると、とにかく身震いするような在庫の山がありました。昔からの慣習で見込み生産を続けていたんですね。そこで、まず在庫の山や遊休資産を処分して、生産体制も受注生産へと転換しました。また、これまでの代理店経由の販売をやめて、小売店に直取引、現金買取、仕入れ価格の見直しをお願いしました。門前払いをされても仕方がない無茶なお願いでしたが、2回、3回と頭を下げるうちに、「飛騨産業の家具がないと売場もつけれないし、しょうがないな」と言っていた。先人が築いてきた技術と商品力、そして信用のおかげだと本当にありがたく思いました。



「HIDA」と同様、国産材のスギを活かした「SUGI」シリーズ。スギの柱目が美しい。

立ったのです。しかし、技術を完成させるまでには5年以上かかりました。無垢材を家具用に圧縮できるのは世界でうちだけ。数え切れないテストとお客さまのクレームが育ててくれた技術です。

スギの家具のデザインはエンツォ・マリー氏、発表はミラノ・サローネ。一気に海外に打って出られました。

苦労して完成させたスギの家具ですから、何とか世界のトップクラスのデザインで出したかったんです。そこへ、岐阜県が各国のデザイナーを招いて地場産業の指導をする事業があり、イタリアのプロダクトデザインの巨匠、エンツォ・マリー氏に出会ったんです。彼はうちの家具を「西洋のものまねだ」とぼろくそに言いましたが、一方で「北斎、桂離宮、高山の町並み、どれも日本の美しい

飛騨高山から六本木、そして世界へ

今後の飛騨産業、そして日本の木工産業は何をすべきだとお考えですか？

じつは東京オリンピックの開催される2020年はわが社の創業100周年なんです。それまでに、次の100年に向かう新

の方や海外の方にも選んでいただけるような家具作りをできればと考えています。

それから、人工林のスギの活用は今後も大きな課題だと思います。単に「国産材を使う」と言うだけではなく、スギを使えば環境も改善し心も癒やされるといったことをアピールできれば状況も変わるんじゃないでしょうか。じつは、私たちの研究所では木材から抽出した樹液も研究しています。地元の農家の田んぼや畑にスギの樹液を散布したところ、収穫量が増えたり米の食味が上がったという成果も出ています。抗菌作用やリラクゼーション効果も高いので、さらに研究を進めています。樹液は葉からも採れるので木を丸ごと使えるメリットがあるんですよ。

最近は大規模なバイオマス発電所を建設してスギやヒノキを使う計画もあるようですが、山の木をわざわざ伐採してチップにするよりも、地域ごとに小さいバイオマス

「デザインだ」と言い、うちの職人に「日本の美をたくさん見て勉強しろ」と叱ってくれた。その熱意が嬉しくて、この人にデザインを頼みたいと、事業のコラボレーション企画に手を上げました。

マリーはイタリアから何度も日本に来てくれて、イタリアの新聞に「わが国の智の流出だ！」とまで書かれましたが、「俺は本物のものづくりを飛騨高山で見つけたんだ」と言ってくれた。家具のデザインも1点で十分なのに椅子やテーブルなど20数点も起こしてくれました。それを世界的な家具の見本市「ミラノ・サローネ」で「HIDA」シリーズとしてお披露目したんです。彼の知名度に加えて、スギのテーブルなんて欧米にもありませんから大きな話題となり、わが社の代表的なシリーズの1つに加わりました。

たなステップを発見したい。その1つの拠点として、2017年3月に六本木の「東京ミッドタウン」にインテリアショップをオープンしました。直接、お客さまと出会ってわれわれも刺激を受けるだろうし、ハイエンド

発電所をつくり間伐材や端材の二次利用を進める方がいい。地域の資源でつくった電力を地域で消費すればもっとも効率の良い自然活用になるはずだ。

経済も同じで、各地の地場産業がしっかりと回れば、それがもっとも強い日本の国力になるんじゃないでしょうか。これからも、地域の人と技術と素材を活かして仕事を広げていきたいと考えています。

取材を終えて・・・

日本の地場産業の家具には、ずっしりと重厚なイメージを持っていましたが、今回、取材でうかがった飛騨産業のインテリアショップは明るく洗練され、いい意味でイメージを覆されました。それと同時に、美しいスギの柱目を活かした家具はしっかりと「JAPAN」を主張しています。気さくにお話に応じてくださった岡田社長のお人柄が、気張らず柔軟なものづくりに重なって見えました。

PROFILE

岡田賛三（おかださんぞう）
飛騨産業株式会社代表取締役社長
一般社団法人日本家具産業振興会副理事長

1943年、岐阜県高山市生まれ。1968年、立命館大学卒業。その後、(株)富士屋代表取締役社長、(株)パロー代表取締役副社長などを務め、2000年、飛騨産業(株)代表取締役社長に就任。従来は廃棄されていた木の節を使った「森のことば」シリーズや、家具には不向きとされていた国産杉を圧縮加工して使用した「HIDA」シリーズなど、業界の常識にとられないユニークな発想でヒット作を生み出す。また、生産体制の大幅な見直しや、国内外の有名デザイナーとのコラボレーションによる家具を製作するなどの改革を行った結果、社長就任から14年でそれまでの2倍となる年間売上50億円を達成。近年は木工職人の若手の育成などにも力を入れている。

飛騨産業株式会社 <https://kitutuki.co.jp/>

OKADA, Sanzo



岡田賛三著
「よみがえる飛騨の匠」
幻冬舎 2017



REPORT

第5回「合板の日」記念式典

第5回「合板の日」の記念式典が11月2日、新木場タワーで250名の参加者を得て開催された。林野庁長官賞、並びに感謝状は大熊幹章東京大学名誉教授(写真中央)に授与された。永年にわたる合板、木質材料に関する研究、及び木材利用の環境貢献等に関する考察などのご功績に対し贈られたものである。当日の司会進行は、みどりの女神 2017 の野中葵さんが務めた。



森の恵み感謝祭

11月11日都下のある野市、青梅市を訪れ、色づき始めた紅葉とゆずの収穫体験などを行い、秋の恵みに感謝するイベントを試験的に行いました。来年には当館賛助会員の皆様との交流会として発展拡大する予定です。先のことですが、木のこと、森のこと、里山の暮らしなどを知る機会として設けていきたいと検討しています。



- 参加イベント**
- 10月7、8日に都立木場公園イベント広場において開催された「木と暮らしのふれあい展」(主催：東京都、東京都木材団体連合会)に出展しました。
 - 11月11、12日に豊洲公園花木とモニュメント広場で開催された「江東湾岸まつり2017」(主催：一般社団法人江東区観光協会)に出展しました。

イベント情報
Event schedule

2017年 12.1 → 2018年 1.25	博物館特設展示「(株)ウッドワン」
ワンコイン工作 (博物館)	※文部科学省による平成29年度「子どもゆめ基金」の助成を受けています。
2017年 12.16	「木のぼち袋を作ろう」
2018年 1.20	「木のシロフォンを作ろう」
2.17	「木のロボットを作ろう」

セミナー情報
Seminar information

- 2018年 1.18 ■ (株)ウッドワン セミナー 15:00～
「持続可能な森林事業の現状と展望」(博物館 4F シアタールーム)
- 2.17 → 18 ■ ウッドマスター【中級】各日9:30～
講習会「-樹種識別を学んでみよう-」(博物館 4F)



オープニングセレモニー

ウッドワンダーランド 2017 (ウッドエコテック 2017)

主催：一般社団法人 日本木工機械工業会

2017年10月27-30日の4日間、ウッドエコテック 2017(日本木工機械展)が2年ぶりにポートメッセなごやで開催され、141社の出展により丸太製材からNC加工など多彩な新鋭機が音を立てて稼働しデモンストレーションが行われた。参加登録者数は2万人を超え、会期中の台風接近などにもめげず盛況を呈した。

別館全体を使つてのウッドワンダーランド2017では、子供から大人まで各年代に向けて木の利用に関するアピールが繰り広げられた。おもちゃ、クラフト、楽器、将棋、インテリア、木造建築、自動車、ドローンまで様々な展示やCLTで作られたステージを使ったセミナー、ミニ音楽会などで参加者を楽しませた。なお、木材・合板博物館もブースを出展し、多くの来場者と交流を行った。

木を 楽しもう

03



ウッドワンダーランドゲート (CLT)

会場内ステージ



東京大学農学生命科学研究科木質材料学研究室のCLTによるゲート (CLT協会)



木製スーパーカー(佐田建美) ナンバーを取得しており、実際に公道を走行可能



オーストラリア原住民アボリジニの管楽器デジュリドゥの演奏(奏者：NATA氏)



カリモク家具ブースの木製遊具(アーティスト：つちやあゆみ氏)



ステージでの将棋解説(プロ棋士による目隠し将棋や小学生らの将棋トーナメントも行われた)



ヤイリギターによるギターと指1本で演奏可能な一五一会の展示・演奏

【フォト575の部】

最優秀賞



『木場のどんどこ船』笠井忠
木場の衆 どんどこ船で夏を呼ぶ

優秀賞



『雨あがり』菅田航洋
雨あがり サルスベリ散る 木のホーム

佳作



『橋光る』山縣敏夫
満開の桜の海に橋光る

佳作



『銀杏拾い』長谷利宏
拾ってよし
眺めてもよし
大銀杏

佳作



『登竜門』川又圭人
少年が
登る柱は
ヒノキかな

【特別賞】

学生奨励賞



『日本人の精神』丹治勇介
水戸市の吉田神社で撮影したこの球体からは、日本人独特の木造の精神を感じられる。

【建材の部】

優秀賞



『ぬくもり』谷川美優
古民家に入って、ふと上を見上げたとき、ぬくもりを感じました。

佳作



『夕日に映えて』多和裕二
ペンキ塗り替え工用の木枠が積み木のように見え、温かい夕日のオレンジ色に照らされて、左近川の川面にも映えていました。

佳作



『木造駅舎とレトロ列車』渡邊史香
真新しい木造駅舎に60年前の塗装の列車が入ってきました、木造駅舎の色と合っていました。

佳作



『台車遊び』神野洋一
旧天川村立西小学校の講堂再利用

学生奨励賞



『おちゃらけ下駄箱前』筒井陽加里
下駄箱も木でできていてぬくもりを感じます。その下駄箱の前で友人にポーズをとってもらったらこういう風になりました。

【課題の部】

最優秀賞



『大好木(だいすき)! 戸越銀座駅!』牛田葵
戸越銀座駅の木造駅舎に触れて喜んでいる女の子を撮りました。

優秀賞



『奏』小原貴仁
リビング内の木育スペースが時にステージと化するのです!

佳作



『朝の光』土屋敏彦
今は懐かしい木造校舎。何か温もりを感じます。

佳作



『のんびりハウス』平野昌子
この「ハウス」は、小さな島にあるアート作品です。心癒される空間で、時間もゆっくり過ぎていきます。

佳作



『雨にも負けぬ檜の香り』本郷順司
屋上の露天風呂が改装されて檜の香りが漂います。

学生奨励賞



『放課後の居場所』鍋木俊介
花輪小学校で撮りました。

第9回 「木と合板写真コンテスト」 入賞作品のご紹介

応募総数：274 作品 作品テーマ：「いやし」「木」「合板」
募集期間：2017年7月1日(土)～8月31日(木)

大賞



『感じる』桜木真希

光明寺に雨宿りをしに来た際、友人が靴下を脱いで渡り廊下の木の感触を楽しんでいました。

特別賞 [理事長特別賞]



『なんだか、ほっこり』川崎愛実子

木の間から差す太陽が、椅子や建物に暖かさを持たせてくれていることを感じられるように撮影しました。

最優秀賞 / 特別審査委員賞



『最古の廻り舞台』佐伯範夫

近畿地方最古の芝居小屋、しかし時代の流れで昭和39年に閉館、その後平成20年に大改修され歌舞伎他演劇を開始。舞台が無い時は見学ができる。この日は見学可能日で仲間の一人が歌舞伎役者になりきってステージを独り占め。

特別審査委員 プロ巨樹カメラマン 吉田繁氏の総評

今回の応募では年齢の若い方も増え、応募される方の年齢層にひろがりが出てきたことはとても素晴らしいことだと思います。また、昨年以上にテーマに合わせて工夫された方も見受けられ、全体的にレベルが上がってきたかと思えます。かつて、カメラを購入するには家一軒分の費用がかかると言われた時代がありました。そんな時代は、一枚の写真を撮るのにも多額の費用がかかり、その仕上がりを待つのも何日もかかる。一枚にかける思い入れは、相当なものだったでしょう。最近は誰もが撮影する時代。SNSで簡単に楽しみを共有することは一般的です。しかし、それらはどれも瞬間のこと。しっかりと考えがあって撮影しているわけではあありません。時代の流れが速い中、こうしたコンテストをきっかけに立ち止まって考えてみる。しっかりと見つめてみる。ちょっと、立ち止まって見渡してみる。そんなコンテストになるといいなあと思います。

「第9回 木と合板写真コンテスト」選考結果

大賞	タイトル	氏名(敬称略)
大賞	感じる	桜木 真希

課題の部	タイトル	氏名(敬称略)
最優秀賞	大好木(だいすき)! 戸越銀座駅	牛田 葵
優秀賞	奏	小原 貴仁
佳作	朝の光	土屋 敏彦
佳作	のんびりハウス	平野 昌子
佳作	雨にも負けぬ檜の香り	本郷 順司

建材の部	タイトル	氏名(敬称略)
最優秀賞	最古の廻り舞台	佐伯 範夫
優秀賞	ぬくもり	谷川 美優
佳作	夕日に映えて	多和 裕二
佳作	木造駅舎とレトロ列車	渡邊 史香
佳作	台車遊び	神野 洋一

フォト575の部	タイトル	氏名(敬称略)
最優秀賞	木場のどんどこ船	笠井 忠
優秀賞	雨あがり	菅田 航洋
佳作	橋光る	山縣 敏夫
佳作	銀杏拾い	長谷 利宏
佳作	登竜門	川又 圭人

特別賞	タイトル	氏名(敬称略)
理事長特別賞	なんだか、ほっこり	川崎 愛実子
特別審査委員賞	最古の廻り舞台	佐伯 範夫
学生奨励賞	日本人の精神	丹治 勇介
学生奨励賞	おちゃらけ下駄箱前	筒井 陽加里
学生奨励賞	放課後の居場所	鍋木 俊介

あともう一步 氏名(敬称略)

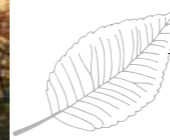
伊東麻美、谷口修、葛谷歩加、割田大輝、星美紀、丹羽賢一、牧野美奈子、山内崇司、安田沙希、太田誠二

木漏れ日散策 …… 01

東京造形大学

〒192-0992 東京都八王子市宇津貫町 1556 TEL. 042-637-8111(代)

<http://www.zokei.ac.jp/university/>



東京造形大学 学長 (サステナブルプロジェクト教授)
山際康之

木材と建築（自然）、地球環境と天気予報（気候）、生産とリサイクル（ものづくり）、江戸の文化（歴史）、自治体の環境活動（地域）、暮らしのなかのエコ（ライフスタイル）といったカリキュラムがあり、各分野の専門家が講師として参加しています。

なかでも木材と建築を主体とした授業「サステナブルデザイン論」では、木材・木質材料の特徴、国内外の木造建築の潮流、家具、木工製品と木工技術などの専門性を習得します。また、社会のしくみやビジネスモデルについて理解し、モノからコトのデザインへ転換した発想力を養います。

授業は、講義や、エコプロダクツ・パッケージ、リサイクルのビジネスモデルといった課題による演習のほかに、企業、自治体と連携した校外型のプロジェクト形式から実践的に社会に還元する取り組みをしています。

昨年、大学は創立50年を迎え、今年第二の開学期となる1年目としてスタートしました。これからもデザインや美術を通じて、新しい循環型社会のあり方について最新の教育、研究成果を発信し続けたいと考えています。

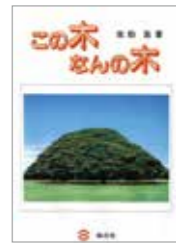
東京造形大学は、デザインや美術の創作活動から社会と深く結びつき実践していくことを建学の精神として、1966年に設立した美術大学です。これまでに、社会で活躍する多くのデザイナーやアーティストを輩出しています。

大学での学びは、グラフィック、アニメーション、室内建築、インスタリアルなどの専攻によるデザイン学科と、絵画、彫刻の専攻からなる美術学科があり、それぞれの領域において専門教育が実施されています。また同時に、全ての専攻を横断する教育として「サステナブルプロジェクト科目」があり、社会で発生しているさまざまな課題、解決方法などから視野を広げていくための授業が開講されています。

サステナブルプロジェクト科目は、主に持続可能な社会の構築をテーマとして、

持続可能な社会をデザインする





A

『この木なんの木』
佐伯浩 著
1,554円 (本体)

1993年に刊行された木を知るための入門書。佐伯浩博士（京都大学名誉教授）によって生活する人と森とのつながりを鮮やかな口絵と詳細な解説で紹介。住まいや家具など生活の中で接する木、公園や近郊の身近な樹木から約110種を選び、その科学的認識と特徴を明らかにしている。

海青社
TEL 077-577-2677 FAX 077-577-2688

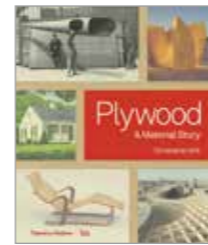


B

『エレクトリック・ギター・レストア』
中野伸司 著
3,500円 (本体) オールカラー

ストラトキャスターの完全レストアガイド。リペア＝修復から、楽器の持つ能力をさらに引き出すレストア＝復活のための書。基礎知識のみならず、工具・ジグについてもわかりやすく解説され、類書では珍しい塗装の方法までも詳述している。修理・修復前後、約650の写真と図解を“見ながら読みながら”作業できる1冊。

海青社
TEL 077-577-2677 FAX 077-577-2688



C

『Plywood: A Material Story』
Edited by Christopher Wilk
Thames & Hudson
6,500円 (本体)

本書は、Plywood (合板) の歴史、18世紀の家具への使用から、19世紀の工業製品出現を経て、20世紀のモダニスト、アルヴァー・アアルトやチャールズ&レイ・イームズらによって称賛された材料にいたる歴史をたどっている。著者クリストファー・ウィルクは、ヴィクトリア&アルバート美術館の家具・テキスタイル・ファッション部門の責任者である。

エーアンドエブックス TEL 03-3868-9560



『木のおもちゃ20作家展』

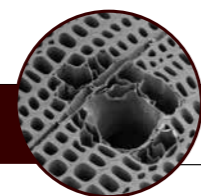
木への思いや愛着を玩具として形にし発表している、日本在住の20人のおもちゃ作家による展覧会。今日の木製玩具の状況を見るときに、子どもたちに木の大切さと、その魅力を伝え、明日へつながる玩具の新しい形を紹介。

会期：開催中～2018年2月4日(日) 10:00～16:00 (入館は15:30まで)
休館日：木曜日、2017年12月26日(火)～2018年1月5日(金)
入館料：中学生以上 ■800円、6ヶ月～小学生 ■500円
東京おもちゃ美術館 東京都新宿区四谷 4-20 四谷ひろば内
TEL 03-5367-9601 FAX 03-5367-9602 <http://goodtoy.org/ttm/>



D

PLY 木の誌上展覧会 (裏表紙)



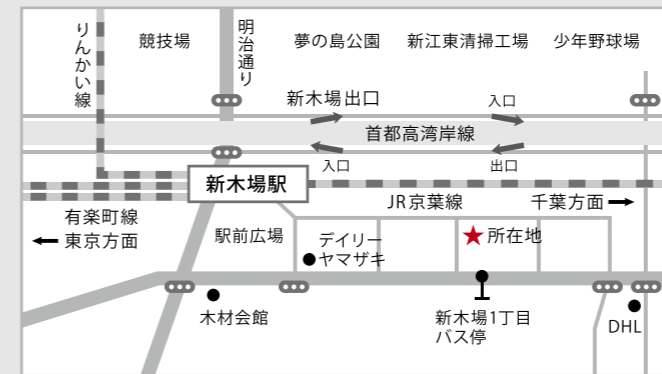
第3回 ■ 走査電子顕微鏡写真「クロマツ」

クロマツは、アカマツ(赤松、雌松)に比べて樹皮が黒っぽいので黒松、またアカマツに比べて葉が長く太く枝ぶりが大きいなど雄々しい印象から雄松とも呼ばれる。日本の天然分布は本州以西(以南)。潮風に強く海岸林として多く造成され、東日本大震災では津波被害を軽減した効果も認められている。アカマツとの間に交雑種がありアイグロマツとも呼ばれる。木材はアカマツと似た材質でさまざまな用途に用いられるが、近年においてはマツノザイセンチュウによる枯損被害を受けて個体数が激減し、木材利用は極めて少なくなり、抵抗性苗の造成が進められている。

門松について文献を少しのぞいてみると、「松は中国の神前思想では永久不変・長寿・若さのシンボルとして考えられており、平安貴族はこの中国的教養を日本に定着させ、正月の子の日に野山から根つきの小松をそのまま植え、小松にこもる精気を人間に感染させることで延命・長寿を祝った。門松は民間から起こったと言われているが、新春に門松を立てて長寿を祈る風習はこのような歴史の流れの中でみやこで盛んにおこなわれるようになっていった」(瀬田克哉著、「木の語る中世」より)と解説されている。

木材・合板博物館 副館長 平川泰彦

公益財団法人 PHOENIX 木材・合板博物館のご案内



【開館時間】 10:00～17:00 (最終入館時間 16:30)
【入館料】 無料
【休館日】 月曜日、火曜日、祝日、
年末年始 (2017年12.27→2018年1.4)

※幼児および小学生の入館には、保護者のつきそいが必要です。
※都合により開館日・時間を変更する場合がございます。

- 【アクセス】
- 東京メトロ有楽町線 ●JR京葉線 ●東京りんかい高速鉄道
「新木場駅」下車 徒歩7分
 - 東京メトロ東西線
「東陽町駅」下車
-----> 都営バス [②のりば] 木 11 甲
「新木場一丁目」バス停下車 徒歩1分

facebook



HP



このビルの
3F・4Fです!

所在地：東京都江東区新木場 1-7-22
新木場タワー 3F・4F

TEL 03-3521-6600 / FAX 03-3521-6602

<http://www.woodmuseum.jp/>

mini 合板情報

03

合板と一口に言っても種類は数多く、使用時はその性能を良く理解して選択する必要があります。主なものは JAS (日本農林規格) で規定されていますが、普通合板、コンクリート型枠用合板、構造用合板、化粧合板、天然木化粧合板、特殊加工化粧合板です。さらに、接着耐久性の区分、ホルムアルデヒド放散量、防虫処理、複合フローリング等が規定され、JAS 以外では防腐・防蟻処理合板、不燃処理合板、足場板用合板、成形加工 (曲面) 合板、強化成形 (硬質化) 合板、抗菌合板、ランバーコア合板、ボードコア合板、ハニカム層やインシュレーションボードをコアにした特殊コア合板 (軽量合板) などが挙げられます。何れにしても慎重かつ確実な製品選びが大切です。(&)

PLY

第3号 2017 winter

【発行日】 2017年12月10日 ■定価：540円 (消費税込)
【発行】 公益財団法人 PHOENIX 木材・合板博物館
〒136-8405
東京都江東区新木場 1-7-22 新木場タワー 3F・4F
TEL 03-3521-6600 / FAX 03-3521-6602
E-mail info@woodmuseum.jp

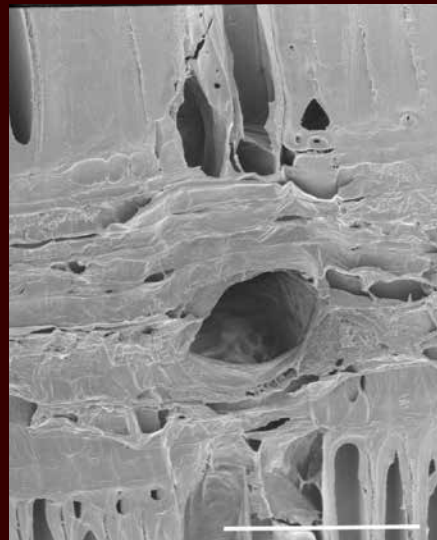
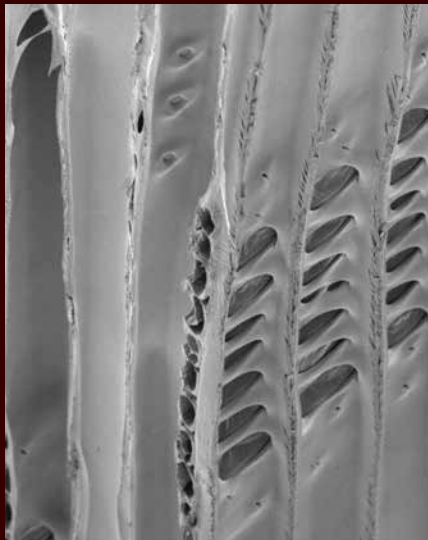
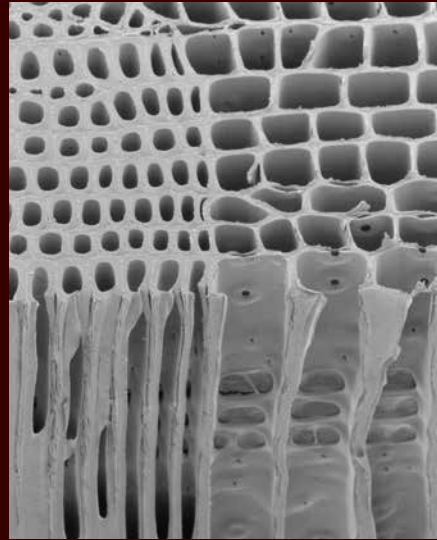
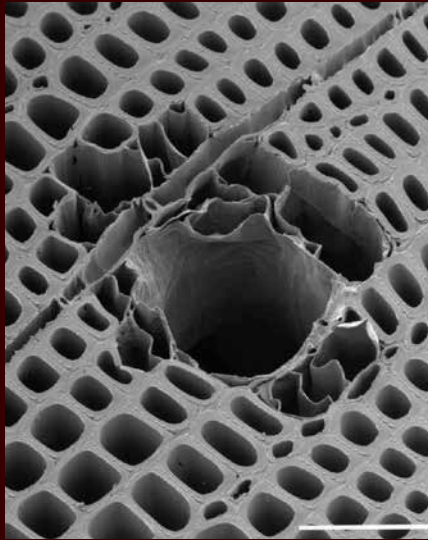
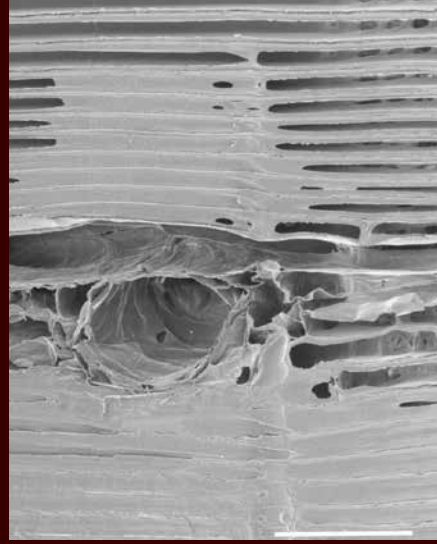
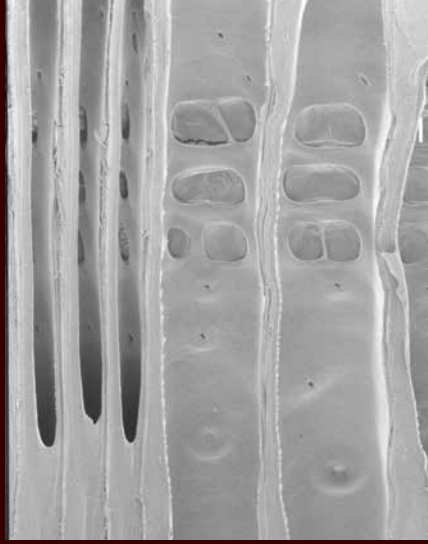
【発行者】 吉田繁
【編集】 安藤直人 (編集長)、山口和美 (副編集長)、
PLY 編集委員会
【デザイン】 丸山佐知子

編集後記

PLY 3号 (冬) をお届けします。季刊で編集に当たりますが、年末が近づくと気ぜわしくなり、時計の針もクルクル早くなる気がします。今年の日本列島では地震の後遺症、新たな水害対策に追われています。被災された地域、方々の1日も早い復旧が実現できることを祈ります。災害の教訓を忘れず、より安全に安心して暮らせる街づくりが求められています。住宅の性能表示制度には耐震等級が設定されています。耐震等級1は、建築基準法で定められた最低の基準で、等級2、等級3とグレードが高められています。より安全性の高い住まいづくりやリフォームによる耐震補強に関心を持って木材利用の可能性を広げたいものです。(&)

PLY (ぷらい)

PLYとは重ねるという意味があり、
WOODを加えると
PLYWOOD (合板)を
意味している。
歳月や経験を重ねることの重要性と、
木材が年輪を重ねて
成長する姿も重ね合わせている。



PLY 木の誌上展覧会 走査電子顕微鏡写真「クロマツ」

